

西洋中世学会第 12 回大会 (2020 年)

ポスター・セッション報告要旨

1 三浦麻美 Asami MIURA (中央大学)

ヘルフタのゲルトルート：女子修道院における執筆活動の意味 Gertrude of Helfta: Writing in the Female Monastery

13 世紀末にザクセンのシトー会女子修道院ヘルフタでゲルトルートが著した『神の愛の使者』を考察する。ゲルトルートは中世後期に盛んとなった聖心崇敬と婚姻神秘主義の先駆であり、中世を代表する女性神秘家の 1 人として神学面からの研究が進んできた。しかしここでは執筆活動そのものが修道院内の文化的背景と日常生活を反映した点に着目し、ゲルトルートが何を書き、読者に対しその内容をどのように意義付けしたかを考える。

2 坂本環 Tamaki SAKAMOTO (西南学院大学大学院 国際文化研究科)

アンブロジーヨ・ロレンツェッティ《善政の寓意》に描かれた二つの「正義」 The Two Images of Justice Depicted in Ambrogio Lorenzetti's "Allegory of the Good Government"

アンブロジーヨ・ロレンツェッティ《善政の寓意》の左端に大きく描かれた「正義」像については、これまでも多くの先行研究がその源泉と機能について解明を試みてきた。しかしこの場面の右端に描かれたもう一つの「正義」像の存在は等閑視され、その理由と二つの「正義」の関係は未だ明らかにされていない。本報告は、古代から中世に至る「正義」の図像的・思想的経緯における本作品の位置付けからこれを考え、よって共和制共同体コムーネであるシエナにおける「正義」の意味を明らかにする。

3 伊丹聡一郎 Soichiro ITAMI (明治大学大学院博士後期課程)

14 世紀ロシアにおけるノヴゴロド人河川賊「ウシクイニク」の活動とペルミのステファン Stephen of Perm and the Activities of the Novgorodian Pirates "Ushkuyniks" in Fourteenth-Century Russia

ペルミのステファン (c. 1345-1396) によるコミ人への宣教とズィリヤン文字の創造は、それ以前のキリスト教宣教の歴史との強い文化的相関性を有するとともに、14 世紀の北東ルーシにおけるモスクワ大公国とノヴゴロド共和国の抗争とも密接な繋がりを有している。他方で、同じく 14 世紀に猖獗を極めたノヴゴロド人河川賊「ウシクイニク」の活動もまた、上記のモスクワ＝ノヴゴロド抗争において重要な役割を果たしていた。本報告においては、従来結びつけられてこなかったステファンと「ウシクイニク」の活動の実態と相互関係について考察する。

4 横川大輔 Daisuke YOKOKAWA (札幌国際大学人文学部)

1356年皇帝カール四世が「金印勅書」を制定した理由についての一考察 Why did Emperor Charles IV Promulgate the “Golden Bull” in 1356?: A Hypothesis

神聖ローマ帝国にとって1356年に制定された「金印勅書」は、揺れのあった選定侯および選挙手続を確定し、もって選挙君主制としての性格をゆるぎないものにしたという評価が確立している。また、大空位時代から「跳躍選挙」時代、そして前皇帝時代の教皇庁との確執という選挙の問題が制定前史として語られる。しかし、なぜそれは1356年に制定されねばならなかったのか。本報告は、制定直前の出来事、ならびに「金印勅書」の内容から、そもそもこのとき国王選挙の問題が中心にあったのかを問い直したい。

5 村松綾 Aya MURAMATSU (東京国立博物館・出版企画室 アソシエイトフェロー)

16世紀ドイツ語圏の金工をめぐる技術と交流 Techniques and Communication: Metalsmithing in 16th-Century German-Speaking Europe

中世ヨーロッパの金工の歴史は貨幣の鑄造や典礼具の制作に始まり、国王や皇帝の下、もしくは力をつけつつある都市の権力者の下で権力を顕示する品々を産み出すことで続いてきた。金工も他の職人と同じく親方が工房を運営し作品が生み出されるのだが、金工界のデューラーとも言える存在がニュルンベルクのW.ヤムニツァーである。本ポスター発表ではヤムニツァーの得意とした小動物や草花を金属に写し変える自然鑄造の技術と、これら鑄造作品の収集に邁進した収集家について報告する。

6 井上智也 INOUE Tomoya (岐阜県公立高等学校 地歴公民科)

ドイツ木版画ビラ資料集 Wickiana の「奇跡のしるし」 —16世紀後半、ニュルンベルクの事例を中心に— “Wunderzeichen” in Wickiana: A Case Study on Woodcut Broadsheets in Late 16th-Century Nuremberg

ドイツ木版画ビラ資料集 Wickiana には、16世紀中に起こった魔女狩りなどの事件や、天変地異などの Wunderzeichen (「奇跡のしるし」) を伝える多くのビラが収録されている。なかでも1560年頃のニュルンベルク発のビラには、オーロラの出現などの天変地異が多く記録され、「奇跡のしるし」の事例が集中している。その社会的背景はいかなるものなのか。Ken Kurihara, *Celestial Wonders in Reformation Germany* (2016) に依拠しつつ、木版画ビラの画像・文章、教会巡察記録などの史資料を分析し、気候変動や「宗派化」の時代におけるルター派帝国都市ニュルンベルクの位置づけを考察することで解明を試みたい。

7 福田智美 FUKUDA Tomomi (東北大学大学院 文学研究科西洋史研究室博士後期課程)

エリザベス1世期における枢密顧問官の年齢層と保有官職の変化
Changes of the Elizabethan Privy Councilors in their Offices and their Ages

エリザベス1世治下、国王の諮問機関として枢密院が重要な位置を占め、その構成員である枢密顧問官は国政の中核を担った。枢密顧問官の属性を知ることは枢密院の組織的特徴を明らかにし、ひいては国家の意思決定を探ることにつながる。

エリザベス治世の枢密院は少数精鋭であったが、治世末期には著しい人数の減少と高齢化により停滞していったとされる。本発表は年齢だけではなく、官職にも注目して、枢密顧問官の名簿を元に人数の変化を年ごとに具体的な数値として明らかにすることで、枢密顧問官と枢密院の特徴を探る端緒としたい。